

るは、前に述ぶる所によりて明らかなるが如く、必ず天寶三載以後の時代に限らるべきことにして、決してその以前に及ぶべきに非ず、従がつて突厥碑文に記せる *Toquz Oruz* なるものは、必ず前に見たるが如く鐵勒の九姓にのみ對比せしめ得べきものにして、*Tuuzuzuz* の回鶻に相當するを理由として、之を碑文の *Toquz Oruz* にも及ぼさんとするが如きは、此の間の事情を解せざるに基く誤解なりといはざる可らず。

以上述ぶるが如きを以て、回教徒の著者は西紀第十二世紀に至る迄 *Uyur* に對しては、本來此の部が屬し、後に此の部が統合するに至りたる團體の名稱を以て之を呼び、漢史に於ては、早く隋唐時代より韋紇・廻紇等の文字によりて其の名を記すと共に、*Oruz* に對しては袁紇・烏紇・烏護、*Toquz Oruz* に對しては、九姓・鐵勒九姓・九姓鐵勒等の名を用ゐたりしが、回鶻なる名も天寶以後に於ては、特に九姓中の他姓と區別して用ゐられたる場合の外は、また一般に *Toquz Oruz* に相當する意味に於て用ゐられたるものと解釋せざる可らず。

註① 此の考に就きては論證を要する點甚だ多く、到底茲に附記するを得ざれど、要するに(一)鐵勒(特勒)なる部は隋書・北史の鐵勒傳を初め、其の他の諸書に據るも、其の分布の範圍極めて廣く、その中に含まるゝ部族は皆トルコ種の大部族なれば、到底突厥碑文に記する *Toios* の如き小部族と見る能はず、(二)鐵勒なる文字は *Türk* の音を寫したるものと見て少しも差支なし、*Türk* の *u* の音價は判然今日より定め難からんも、鐵の唐代の音と思はるゝ *tiet, tiet* の母音を以て寫し得べき音なりしことは争ふ可らず、勒は *luk, lok* 等の音を有したるものなること疑なく、唐代頻りに音譯上に用ゐらるゝ錄、祿等と共に *luk, lok, ruk, rk* 等の譯に用ゐられたるものと考へらる、回鶻可汗の名に葛勒可汗あり、沙陀盡忠の弟に葛勒阿波あり、此等の葛勒は俱錄阿波なる語の俱錄 (*külüg*) と同一なるが如きは其の一例なり、(三) *Türk* の音に對しては突厥なる文字用ゐられたれば、別に鐵勒なる文字を用ゐるべき筈なしといはんも、然も漢史上同時に同一種族を表すに異字を用ゐるの